

必修基本科目「ラーニング・コミュニティ」の可能性と課題

——科目間連携による大学祭プロジェクトの事例から——

関 口 知 子

Key words: learning community, service learning, ESD, peer group, project learning

1. はじめに

本稿は、大学基本科目としての「ラーニング・コミュニティ」の意義と可能性を考察するものである。以下では、日本の高等教育における「サービ斯拉ーニング」推進の社会的背景を概観し、なぜ今、「ラーニング・コミュニティ」なのかを説明する。そして、2011年度からスタートさせる新カリキュラムの必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】が、「実践的学びの共同体」として培ってきた本学の教育実践を南山大学短期大学部として新体制に移行後も発展的に継承していくためのものであることを確認する。その上で、2009年度に取り組んだ「国際協力系列の科目間連携によるラーニング・コミュニティの試行的実践」とその成果としての「大学祭プロジェクト」の事例を紹介し、基本科目【ラーニング・コミュニティ】の可能性と課題を探求したい。

2. 今、なぜラーニング・コミュニティなのか

2.1. 高等教育とサービ斯拉ーニング

近年、日本の高等教育機関において、サービ斯拉ーニングが、学生に

社会参画を促す「市民性教育」¹⁾の有効な教授法 / 学習法の1つとして広がっている。サービ斯拉ーニング²⁾とは、「体験学習」の手法を取り入れて、学生の正課授業での学びを地域でのボランティア活動や社会貢献活動に活かす教育手法・教育プログラムのことであり、「実社会での体験や行動を通した、生きた学び」を重視するデューイの経験教育思想に根ざしている³⁾。

サービ斯拉ーニングが日本の大学でも推進され始めた背景には、都市化・サービス経済化・核家族化・個人化・少子化などの社会構造の変化に伴い、地域の連帯感や人間関係の希薄化が進み、若者が主体的に地域や社会に関わる機会が少なくなっているとの認識の広がりがある。2002年の文部科学省中央審議会による答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」は、実社会での経験を通して社会の形成者の自覚を育み、視野を広げ、将来の人生設計に役立てることを期待して、高等教育機関においても学生の地域や社会でのボランティア活動を積極的に奨励する指針を提示した。これを契機に、大学で正規の教育活動としてボランティア関連科目やボランティアセンターの設置が進む。また、2003年度から2007年度にかけて、文部科学省による「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)や「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)においても、「地域活性化への貢献」「大学と地域連携」「持続可能な社会につながる環境教育」等のテーマで学生のボランティア活動や社会貢献を促す実践的な取組が数多く採択され、全国の様々な大学⁴⁾が、サービ斯拉ーニング関連科目の配置、地域や企業・NPOと連携したインターンシップ制度やボランティア統括部門の整備、国内外でのフィールドワークを含むサービ斯拉ーニング科目の単位認定化などの動きを進めてきた(斎藤, 2010; 桜井・津止, 2009; 和栗, 2008)。

一方、サービ斯拉ーニングとともに、近年日本の初年次教育で注目されるようになってきたのが、教員間・学生間・科目間の連携とコミュニケーションの深化によって、学生の能動的・協働的な学びあいを促進する「ラーニング・コミュニティ=学習共同体づくり」(Gabelnick, 1990)の学

習モデルだ。ラーニング・コミュニティは、今日、大学のカリキュラム改革や授業改善だけでなく、ビジネスの世界や地域コミュニティ等のあらゆる組織の変革に援用されているが、社会的実践への参加が学習の基本形態となるサービスラーニングにおいても不可欠といえる。大学や地域の現場^{フィールド}で、サービスラーニングに携わる学生たちが、目的を共有する多様な仲間たちと共に現実的な課題に協働して取り組む過程で、自発的に学び続ける「学習する組織」（センゲ, 1995; センゲ他, 2010）や「実践の共同体」（Lave & Wenger, 1991; Wenger, et. al., 2010）を生み出し、学生一人ひとりがそれぞれの経験から意味をくみとりながら「学び続ける力」「自分を変えていく力」「社会を変えていく力」を獲得していくことが期待されているからだ。

2.2. なぜ必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】なのか

では、なぜ必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】なのか？ 以下、簡単に説明したい。

本学は、「実践的英語教育」に加え、「体験学習と宗教教育を基盤とする全人教育」を柱として、小規模キャンパスだからこそ実現できる「顔と名前の見える関係性」の中で、学生相互の学びあいを促す「学習共同体づくり」に取り組み、「南短コミュニティ」を育んできた歴史がある⁵⁾。

例えば、【コミュニティ・アワー】の時間を水曜午後に設置し、【指導教員との時間】や【新入生歓迎会・リクリエーション大会・オーラルインタプリテーションフェスティバル・公開講演会・フィールドワーク報告会・国際協力ワークショップ・宗教教育ビデオアワー・南山教会でのクリスマス聖式】などの行事を組み込むことで、学生たちが集い、関わりあい、ピア・グループを形成して学びあう場をつくり、さらに学科科目と連動した成果発表やワークショップの場としても活用してきた。また、【コミュニティ・アワー】以外の共同体づくりの仕掛けとして、【ベタニア懇親会】（1年コア・クラス親睦夕食会）や【オーラル・コミュニケーション期末共通試験】（ポスター・セッション形式の英語によるグループ・プレゼンテーション）、【All English の英語合宿】（英語教員を目指す学生たちの合

宿)、【宗教教育と連動した本学伝統のサークル活動（ハンドベル・ヴォックスアンジェリカ・パイプオルガン）】（入学式や卒業式、フィリピン子ども支援コンサートでの成果発表）等がある。

こうして、本学の教育活動の中に様々な形で埋め込まれてきた「学習共同体づくり」の良い実践を、2011年度から南山大学名古屋キャンパスで始まる新体制に移行後も発展的に継承し、新カリキュラムの中に体制化していくことが、必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】を立ち上げる大きな意義の一つである。また、強制ではなく自発的な参加を奨励してきた【コミュニティ・アワー】の活動は、近年の学生の多様化に伴い、積極的に参加する学生の減少がみられ、コミュニティ・アワーの中で学びあう機会が十分に活かされていない状況も生まれている。こうした課題を解決し、全ての学生に「関わりあい・学びあう機会」を提供することが、全員参加を前提とする必修科目として【ラーニング・コミュニティ】を導入するもう一つの意義である。必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】は、新しいキャンパスで2年間を共に過ごす新入生たちの「学習共同体づくり」を推進していく役割を果たすことが期待されている。

3. ラーニング・コミュニティの試行的実践：国際協力系列での科目間連携

本章では、【ラーニング・コミュニティ】の試行的実践を意図して取り組んだ国際協力系列での科目間連携の事例を紹介し、基本科目【ラーニング・コミュニティ】の可能性と課題を考察していく。

3.1. カリキュラム・ラーニング・コミュニティの応用：ESD科目群として有機的統合化

まず、個人レベルの科目間連携の取組から紹介しよう。筆者は、2005年度から国際協力系列の担当として、専門科目以外にサービ斯拉ーニング系科目を受け持っており、地域のNPO/NGOと連携し、学生のボランティア



図1 ESD 科目群として有機的統合化

注：SL（service learning）導入科目

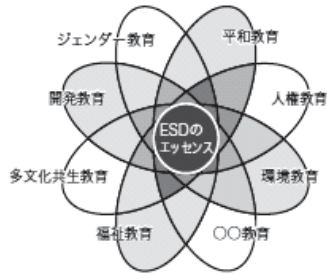


図2 教育の共通課題でつながるESD

出所：特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年推進会議」作成の図

ア活動を促してきた。しかし、学生の問題関心を社会的実践に向け、行動を動機付ける機会は、サービラーニング系の科目に限られてしまう限界があった。

そこで、「知る⇔考える⇔行動する」のプロセスを重視するサービラーニングの「参加型学習スタイル」を他の授業にも取り入れるため、国内外で推進されている「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）」⁶⁾の理念を中核テーマに据え、自分が担当する授業を「ESD クラスター科目群」として有機的統合化を図った（図1）。ラーニング・コミュニティのカリキュラム・モデルを応用した、個人レベルの授業改善の試みである。

「望ましい未来をつくる人づくり」という共通課題でつながり、開発教育、環境教育、多文化共生教育などの多様な教育領域を包括的に統合するESD（図2）の主な特徴は、①学際的でホリスティックであること、②持続可能な未来に向けた価値づけがあること、③批判的思考および問題解決を重視していること、④多様な学習法を活用すること、⑤学習者自身が意思決定に参加すること、⑥地域の文化に適合していること（永田，2010）であり、そうした部分ではなく全体のつながりを包括的に捉えるシステム思考や参加型学習法、多様性を尊重する価値観を重視する点が、担当する

授業を有機的に統合する大きな教育枠組みとして最適と判断したためだ。

そして、ESD 科目群の大きな教育ミッションを、「持続可能な社会の実現に向けて自ら変化の担い手(change agent)になるハチドリの育成⁷⁾」とし、サービ斯拉ーニングを導入している演習・実習系科目【研究プロジェクト(異文化間に育つ子どもの調査研究入門)】【国際協力入門】【国際協力フィールドワーク国内プログラム】だけでなく、講義系科目【多文化共生論】【グローバル文化論】【異文化間コミュニケーション】の中でも学生の学びあいとアクションを動機付けられるよう授業の進め方や教材を工夫した。また、アクティビティを豊富に盛り込んだテキスト開発を進めた⁸⁾。さらに、講義系課目の履修生にもアクション・リサーチを促すため、期末課題には、半期の学びに加えて更にリサーチが必要となるテーマを設定し、レポートにまとめるだけでなく、レポートでまとめた主張を「自分の意見文」として新聞に投稿する課題を、2007年度から実施している。投稿文が採用された学生数は報告があった分だけでもかなりの数になるが、その後も自発的に新聞投稿などで自分の声を社会に発信するようになった学生もみられ、新聞投稿は学生のアクションを動機付ける有効な課題となりうる。

3.2. 国際協力系列の科目間連携：大学祭プロジェクトの試行的実践

次に、基本科目【ラーニング・コミュニティ】(2年次)の「学科科目と連動したプロジェクト学習」の試行として、2009年度に国際協力系列の学生が取り組んだ「大学祭プロジェクト」を紹介しよう。

(1) 大学祭プロジェクトと連動する学科科目の概要紹介

まず、大学祭プロジェクトに連動する学科選択科目として筆者が担当する【国際協力入門 A/B】(2年生対象、通年、各1単位)の概要を説明する(表3)。この授業では、ボランティアを「自発的に問題解決に向けて行動すること」と定義し、学んだ知識を実際のアクションにつなげることがねらいである。春学期前半で、「国際協力」・「国際開発」といわれる現場の裏側にある地球規模の「構造的暴力」⁹⁾を知り、世界の貧困や環境・

表3 2009年度【国際協力入門A/B】(2年生対象, 通年, 各1単位) 授業概要

<p>【授業のねらい】 環境・開発・貧困・人権・平和など国際社会が抱える諸課題への問題意識と問題解決型の行動力を養成することをねらいとする。</p> <p>【授業内容】 「国際協力」「国際開発」といわれる現場の裏側にある「地球規模の構造的暴力」を学び、身近なレベルで何が自分のできるのかを考え、行動する。</p> <p>【到達目標】</p> <p>(1) 知識目標：世界で広がる貧困・環境破壊・人権侵害の根本原因は何か、世界のしくみに内在する構造的暴力と私達の暮らしとの相互関連性を知り、問題意識を持つ。</p> <p>(2) スキル目標：【春学期】 ボランティア体験をレジュメにまとめ、口答発表できる。【秋学期】 課題を発見し、課題解決に向けて実現可能な行動企画を立案・実行できる。パワーポイントにまとめ、口答発表できる。</p> <p>(3) 態度目標：よく聴き・調べ・考え・行動できる。物事に能動的・計画的に取組み、他者と協働できる。リーダーシップを発揮できる。</p>	
<p>【春学期 国際協力入門A】</p> <p>1. オリエンテーション：なぜ、「国際協力」なのか</p> <p>2. 1本のバナナから考える</p> <p>3. エビの履歴書から考える</p> <p>4. ダーウィンの悪夢から見える地球規模の構造的暴力</p> <p>5. 児童労働：働く子どもたちの実態と貧困の連鎖サイクル</p> <p>6. No Action No Change：「やってみよう！ボランティア」概要説明</p> <p>7. フェアトレード：買い物から国際協力</p> <p>8. 「ボランティア2名を採用するなら」：あなたなら誰を選ぶ？</p> <p>9. 地域の国際化：足元から広がるNGO・NPO活動</p> <p>10. NGO/NPO活動に携わる実践者に学ぼう：外部講師</p> <p>11. やってましたボランティア！：レジュメで体験発表①</p> <p>12. やってましたボランティア！：レジュメで体験発表②</p> <p>13. やってましたボランティア！：レジュメで体験発表③</p> <p>14. やってましたボランティア！：レジュメで体験発表④</p> <p>15. 統括（半期振り返り） 期末レポート提出</p>	<p>【秋学期 国際協力入門B】</p> <p>1. Advocacy vs. Aids：ホワイトバンドの何が問題だったのか</p> <p>2. 「南短祭2009：Positive Action Plan」立案</p> <p>3. 「南短祭2009：Positive Action Plan」具体化</p> <p>4. 「南短祭2009：Positive Action Plan」グループ・プレゼン</p> <p>5. 「南短祭2009：Positive Action Plan」成果の振り返り</p> <p>6. No Action No Change：「わたしのハチドリ計画」概要説明</p> <p>7. NGO/NPOの良い実践に学ぼう：4つの団体の比較・分析</p> <p>8. 先輩の良い実践に学ぼう：ゲスト講師（南短OG）</p> <p>9. 外部講師のプレゼンに学ぼう：講演「生物多様性と私たちの暮らし」</p> <p>10. わたしのハチドリ計画：パワーポイントで発表① PC室</p> <p>11. わたしのハチドリ計画：パワーポイントで発表② PC室</p> <p>12. わたしのハチドリ計画：パワーポイントで発表③ PC室</p> <p>13. わたしのハチドリ計画：パワーポイントで発表④ PC室</p> <p>14. 持続可能な卒業旅行「サステナ・トリップ」を考えよう</p> <p>15. 統括（通年総振り返り）「わたしのハチドリ宣言」提出</p>
<p>【評価方法】 授業参加度・振り返りシート・レジュメ・プレゼン・ピア相互評価・期末レポート</p>	
<p>【テキスト】 田中優・樫田秀樹・マエキタミヤコ編 [2006]『世界から貧しさをなくす30の方法』合同出版</p>	

食糧問題などの諸課題と自分自身の生活とのつながりに気づき、問題意識を養成する¹⁰⁾。後半は、各自の問題関心に基づき、ボランティアに個人で挑戦してもらう。秋学期は、春学期に養成した問題意識を出発点に、課題解決に向けた行動企画をグループで立案し、大学祭・キャンパス内・地域社会で協働して実践し、成果をあげることが課題である。

大学祭プロジェクトは、秋学期の前半4コマを使い、2006年度から実施している。例年の流れは、まず履修生が、大学祭での主たる活動基盤を【研究プロジェクト（以下、研プロ）・南短祭実行委員会・サークル・有志企画】のいずれにするかを決め、プロジェクト・チームを形成する。その上で、授業での学びを活かした実行可能な行動計画を、【立案→準備作業→パワーポイントによるミッション・プレゼン→南短祭で実行→成果の振り返り→次年度に向けた改善課題の提案】という手順で進める。このプロセスの中で、それぞれのプロジェクト・チームは、課題発見力・アイデア力・計画力・リーダーシップとチームワーク力・発信力・実行力が試されることになる。

(2) 南短祭 2009：大学祭プロジェクトの実践概要

2009年度は、南短祭実行委員チーム、研プロ Q9 チーム、研プロ Q10 チーム、ステージ企画「Shake Forward2009」チームの、4つのプロジェクト・チームが結成された。「ミックスルーツ」¹¹⁾の若者が創る音楽ライブ「Shake Forward 2009」のステージ企画については、2011年度の新キャンパス移行を前に、いりなかキャンパスでの学校祭を盛り上げようと、学生委員会・南短祭実行委員会及び国際協力系列の教員間・学生間の連携により実現されたものである。その経緯を表4に示したが、【ラーニング・コミュニティ】の試行として実施した5月の国際協力系列合同講演会（【研プロⅡ】2年生3クラス：Q8・Q9・Q10対象）で、アイヌのルーツを持つ同世代の女性、酒井美直さん（アイヌ舞踏グループ AINU REBELS 代表）を招き、彼女のライフ・ヒストリーに学んだことが始まりだ。さらに、その後の【多文化共生論】の授業で、AINU REBELS を含む様々な


表 4 大学祭プロジェクトに関わる国際協力系列の科目間連携と経緯




ミッション	日時・場所	内容
2009 年度 ESD(多様性×持続可能性)のテーマでつながる学びの共同体づくり	2009 年 5 月 27 日 (水) コミュニティ・アワー @ No. 1 教室	【研究プロジェクトⅡ 3 クラス授業連携】 国際協力系列合同講演会 ゲスト講師：酒井美直さん (アイヌ系ミックス・ルーツの若者, アイヌ舞踏家, AINU REBELS 代表) 演題：「AINU PRIDE: 私の生きる道」→ レポート提出
	2009 年 6 月 16 日 (火) 1 限目 @ LL 教室	【多文化共生論】 講義 テーマ：日本の中の多様性：ミックス・ルーツの若者たちの声を聴こう NHK ドキュメントにっぽんの現場「ミックスルーツ：誇りを胸に HipHop」(30 分) を授業の中で視聴→ ShakeForward を招致する機運となる
	2009 年 6 月 30 日 (火) 1 限目 @ LL 教室	【多文化共生論】 ゲスト講演 ゲスト講師：宮ヶ迫ナンシー理沙さん (日系ブラジル人の若者, マルチカルチャー・チルドレンの会代表) 演題：「Roots of Many Colors」→ レポート提出
	2009 年秋学期 10 月 7 日 (水) 10 月 14 日 (水) 10 月 21 日 (水) @ PC 教室	【国際協力入門 B】「南短祭で行動しよう」(3 コマ) 1. プロジェクト・グループ結成：全国の大学祭の良い実践に学び, 企画を立案 2. 企画の具体化：企画の実現に向けて, 役割分担して作業 3. ミッション・プレゼン：「私たちは, ○○のために, 南短祭で△△を実行し, □□を達成します！」ポスター発表
	10 月 25 日 (日) 南短祭 2009「意心伝新～ For Us, For Earth」 @ いりなかキャンパス	南短祭で企画を実行 1. 「Shake Forward 2009」チーム：ミニ・ライブとトークセッション開催 2. 南短祭実行委員チーム：エコ学校祭のバージョンアップ 3. Q8, Q9 チーム：授業での学びを活かしたブース企画
	11 月 4 日 (水) @ PC 室	【国際協力入門 B】「南短祭を振り返ろう」(1 コマ) 成果の振り返り：「準備段階で頑張った事・当日の目標達成度を個人とグループで分析・次年度への改善課題」を振り返りシートにまとめる→個人で振り返りシートを記入後, グループで振り返り, 成果と今後の課題をチーム・リーダーが口答発表→振り返りシートは学生委員会に回覧し, 次年度に活かす

ミックスルーツの若者による「Shake Forward チャリティ・ライブ」を紹介するNHKドキュメント「ミックスルーツ：誇りを胸にHipHop」を視聴し、学生の高い共感を得た。これが契機となり、「Shake Forward」招致の機運が生まれ、5月の合同講演会に参加した【研プロⅡ】の3クラスから有志を募り、大学祭プロジェクトの「特別ステージ企画」として具体化していくことになったのである。

6月末の学生委員会審議を経て「Shake Forward」招致が決定するまでの段階では関係教員の連携支援が必要だったが、出演者との打ち合わせから企画の具体化・運営・実施は全て学生が担い、教員は情報提供や学生同士をつなぐ役割に徹した。「Shake Forward」チームが本格的に活動を具体化したのは9月以降で、【国際協力入門B】の履修生がピア・リーダーとして主導的役割を果たし、授業内外で準備を進めていった。各プロジェクト・チームの実践内容については、表5・表6を参照されたい。

表5 ステージ企画 「Shake Forward 2009」の実践報告(学生のレポートより抜粋)

企画の目的	ミックス・ルーツの若者と共感的に学びあう多文化交流の場を創り、無知からくる偏見をなくす。一人ひとりの多様性が大切にされる環境を南短から創る。	
ミッションテーマ	Shake（感動・共振・創造力）＋Forward（それをさらにコミュニティや世界に広げる！）～音楽と対話で多文化コミュニケーション～	
内容	<p>〈準備段階〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み前から、チーム・リーダーが出演者代表と連絡を開始 ・ポスター・フライヤー・大看板の作成 ・各クラス代議員、ラーニングルーム、八事駅など学内外の様々な人や場所に、許可を得てフライヤーを掲示 ・NHKドキュメントの上映会を開き、ステージ企画で協働する南短祭実行委員会を含め、50人の学生とミッションの共有化 ・mixiやHPで「Shake Forward2009」のイベントを学内外に周知 ・控室の準備（茶菓子購入・黒板飾り）と機材の準備 <p>〈当日のスケジュール〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出演者が来校後、リハーサル開始 ・控室に案内。1回目のステージまで南短祭の案内 	 <p>↑ チーム自作のフライヤー</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・【ステージ1回目（14：20～14：50）】 ・【トークセッション（45分）】学生との対話交流会 ・【ステージ2回目（16：00～16：30）】 ・参加者へのアンケートの実施 ・出演者の見送り <p>〈イベントにかかった費用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出演費・交通費・控室と交流会用の茶菓子 	
		<p>2回目ステージの様子</p> 
	<p>出演者と企画チームで最後に記念撮影</p>	<p>トークセッションの様子</p>
工夫度 魅力度	<ul style="list-style-type: none"> ・Shake Forward 企画の意義やミックスルーツの若者について伝える啓発方法を工夫（NHK ドキュメント上映会を開催。わかりやすい言葉でイベントの意味を伝えるチラシの作成） ・「イベントに参加したくなる」魅力的なポスター・フライヤーを作って、学内外に宣伝。 ・トークセッション進行の仕方やゲスト接待の具体的な方法について、アイデアを出し合い、工夫。 ・当日のステージで、観客を巻き込むための場の盛り上げ役を友人に依頼。 	
チーム ワーク	<p>チーム代表・司会・タイムキーパー・機材確認・ゲスト接待係・広報・南短祭本部との連絡係・会計で役割分担。</p>	
成果	<p>アンケートの「ミックスルーツの人々に対して理解が深まったか」、「今日のライブとトークセッションを通して、ミックスルーツの人に対してのあなたの考えに変化はあったか」の問いに、回答者全員が「はい」と答え、「どう考えが変化したか」の問いには「明るいイメージが多くなった」、「プラス思考をたくさん持っていると思った」、「自分が今まで体験した悩みはミックスルーツの人と同じで共感できた」、「ミックスルーツに関して考えたことがなかったので、よい機会になった」等の答を得た。ミックスルーツの人々を知ってもらい、彼らと直接語り合い、共感しあえる場を創れたことが一番の成果。学外の何人もの友人から「ただ流行の歌手を呼ぶより、こんな企画を自分たちもやりたい！」と評価してもらえた。</p>	

反省点 課題	トークセッション企画の決定が遅く、会場申請が遅れたため、広い教室を確保できず、当日は椅子が足りない、会場に入れない問題が発生。また、時間がおしてアンケート回収を後日にしたため、回収率が低下した。大きなイベントの企画・運営には、十分な準備体制をとり、一人ひとりが分担した役割を超えて、メンバー間で連携することが課題。
-----------	---

表 6 各プロジェクト・チームの実践報告（学生のレポートより抜粋）

グループ	南短祭実行委員チーム	Q9 クラス・チーム	Q10 クラス・チーム
企画の 目的	「地球規模のゴミ問題」 解決への一歩として、リ ユース食器の使用とゴミ 分別徹底で、〈エコ学校 祭〉の実践	「日本の食料輸入が世界 の食と貧困の問題につな がっていること」への気 づきを促す啓発と地産地 消の実践	「世界の児童問題」への 気づきを促す啓発とチャ リティー・フリーマー ケットの実践
ミッシ ョンテ ーマ	捨てる前に考えよう	U ～ DONDON つなが る WA	知ってる？ 世界の子 どもたち
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ分別の徹底化 ・リユース食器回収箱設 置 ・分別案内のためのポス ター、チラシの作成 ・食品ブースで皿・箸・ スプーンのリユース食 器の使用を推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・Q9 サイトを開設し、 南短祭宣伝＋「知るこ と、選ぶことから始ま る国際協力」の啓発 ・国産小麦で作られた 「こだわりの国産うどん」を1食 250 円・限 定 210 食で販売。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手作り募金箱・啓発ポ スター作成 ・古着や小物フリマの売 り上げをチャリティー 募金 ・児童ポルノ・子ども兵・ 児童労働など世界の子 どもたちの現実をスタ ンプラリーで啓発。 
工夫度 魅力度	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミ箱設置場所やリ ユース食器の返却の仕 方が「分かる」ポスター を作成し、掲示 ・リユース食器ゴミ箱の 隣に食器回収箱を設置 ・スタッフミーティン グ・放送・チラシ・ポ スターなど様々な方法 で周知。 ・裏紙でエコ・ポスター づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビラや看板に QR コ ードをつけ啓発クイズに 簡単アクセスしてもら い、正解者に割引特典。 ・マイ箸持参＋クイズ正 解者はダブル割引で 198 円。200 円でおつ り 2 円の募金を誘導す る募金箱を設置。 ・国産材料を選び、安く おいしく作る工夫。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタンプラリー形式に して啓発ポスターを読 んでもらう工夫。 ・募金でフリマの割引券 の特典 ・授業で学んだ児童問題 をテーマごとにポス ター化 ・児童問題の本の設置 ・裏紙でエコ・スタンプ ラリー用紙の作成

チームワーク	ゴミ分別と渉内で役割分担	ブースデザイン隊・食品研究隊・HP作成隊で役割分担	児童問題のテーマごとでチームを作り役割分担
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度よりゴミ削減 ・リユース食器回収率は98%と前年より上昇 	<ul style="list-style-type: none"> ・うどんを完売 ・「ベスト・オブブース」受賞 ・売上17985円と募金1484円をPHD協会に寄付 	フリーマーケット収益8960円と募金2798円をユニセフに寄付
反省点課題	1年生への説明不足でリユース食器の利用が少なかったのが反省点。情報の共有・伝達のしくみの改善とリユース食器回収率100%達成が次年度の課題	メンバー間のミッション共有に時間がかかり、一部のメンバーに負担が集中した。編入試験や就職活動など個々の事情を超えたメンバー巻き込みが課題。	商品陳列・ポスター掲示・ブース呼び込みの仕方に改善の余地があった。重い社会テーマでも、いかに興味をひきつけて、視覚的に訴えるかが課題。

以上、秋学期の【国際協力入門B】を中心に、国際協力系列の教員間・科目間連携のもとで、【研プロII】【多文化共生論】【国際協力入門A】の学習と連動させながら進めた大学祭プロジェクトの実践事例を紹介した。

大学祭後の振り返りで学生から出された改善課題としては、「複数の企画をかけもちすると不十分な運営体制になるので、1人が関わる企画は1つに絞った方がいい」「今年の2年生は、自分たちが学んだことを活かしたテーマ性のある企画が多かったが、1年生はただ模擬店をやるだけに終わっていた。自分たちが学んでいることを、どんな形でもいいからつなげて欲しい。それこそ南短らしさだと思う」「1年生にはリユース食器の意義もしくみも理解されておらず、利用が少なかったのが残念。南短祭実行委員会内の情報共有のしくみと、その他の学生に対する情報伝達のしくみを改善すべき」などがあった。これらの点については、基本科目【ラーニング・コミュニティ】で、全学生が学習成果を社会的実践に活かす場として大学祭を位置づけ、学年を超えた交流と連携を深めながら、大学祭プロジェクトに関わっていけば、ある程度改善していけるだろう。

(3) プロジェクト学習の鍵となる学びあいのプロセス：振り返りとピア・レビュー

大学祭プロジェクトという非日常のイベントでの実践が終わると、【国際協力入門B】では、授業の学びを日常生活に活かすプロジェクト学習に取り組んでいく。大学キャンパス内や家庭の中、地域社会で、日常レベルで自分たちにできることを「わたしのハチドリ計画」¹²⁾として立案し、パワーポイントで発表してクラスメートに伝え、行動の輪をクラスの仲間たちに広げることがねらいだ。個人・グループのいずれで取り組んでもよいが、グループの場合は最大3人までを上限にしている。

この「ハチドリ計画」は2007年度から実施しており、2009年度は、過年度のベストプレゼンターであった卒業生に模範プレゼンをしてもらった。さらに、プラン立案に向けた情報リサーチ段階では、全国の若者が関わっているNGO/NPOの活動内容を比較分析したり、外部講師の講演から「内容」だけでなく「発表の仕方」を学んだりする時間も設けている。持続可能で希望の持てる社会づくりに向けて既に動いている人々の様々な良い実践に学び、自分が「問題」だと思っているテーマに対し、どんなアプローチが可能なのかを考察してもらうためだ。

ところで、こうしたプロジェクト学習に欠かせないのが、「振り返り(reflection)」の作業である。振り返りには、「振り返りシート」や「ジャーナル」を使った個人単位の作業もあれば、小集団・クラス単位で個人の気づきや発見を共有する「分かち合い」の作業もある。いずれにせよ、プロジェクト学習が一人ひとりの学生に「意味ある学び」として内面化されるためには、自らの学びのプロセス全体を俯瞰的に省察し、自分の成長を客観的に「振り返る」作業が不可欠である。【国際協力入門】の授業でも、毎回個人で振り返る時間を取り、発表の際には「ピア・レビュー」で相互に評価しあう。1年の学びの集大成である「ハチドリ計画」の発表では、「プレゼン評価シート」に記入しながら、互いの発表を評価しあうことにしている（このシートの提出で、聞き手の傾聴度も確認できる）。具体的には、計画内容の実現可能性・持続可能性・参加のしやすさ・面白い工夫などを

ポイントに内容評価をして「ベスト計画賞」、パワーポイントの分かり易さや発表者のプレゼンの仕方（声の明瞭さ、話す速度、周辺言語、表情、視線、しぐさ、服装など）をポイントにスキル評価をして「ベスト・プレゼン賞」を毎回選出していき、最終プレゼン日は、全ての発表の中で「最も心に残るベスト・プレゼン」を理由とともに皆で発表しあう。

そして、最終授業日には、1年間の学びを振り返り、各自がこの授業で学んだことをこれからどのように活かしていくのかを、「わたしのハチドリ宣言」と題した振り返りシートにまとめ、一人ずつ口答で発表し、終了となる。表7は、その「ハチドリ宣言」の一部抜粋である。学生たちのハチドリ宣言からは、卒業後も、それぞれの新しい場所で新しい人やコミュニティとつながり、学び続ける姿勢と、変化の担い手として自分にできることをし続けたいという意欲が感じられる。ESD 科目群をつなぐ「持続可能な社会の実現に向けて自ら変化の担い手になるハチドリの育成」という筆者の教育ミッションは、この授業では一定の成果をあげているといえるだろう。

表7 2009年度【国際協力入門A/B】学びあいの軌跡（「わたしのハチドリ宣言」一部抜粋）

-
1. 学んだことや心が動かされたこと、真実を知ったなら、それを自分と何らかの形でつなげ、どんなに小さくてもいいから生活に活かしていくこと。このプロセスがあって初めて、本当にそのことを「学んだ」といえるのでは？と思っていたので、この授業は実際にそれを実践し、しかも他の人の実践からも学べ、自分にはピッタリだった。クラス全員が自分なりに問題意識を持ち、考え、計画し、それをそれぞれのカラーで表現できたことは、とても価値があったと思う。これから卒業して状況は変わっても、真実にアンテナを張り続け、それを自分なりに考えて実行に移し、周りの人と分かち合う習慣をずっと続けていきたい。家庭においても地域においても財産となれるように、自分の持っているものを活かし続けたい。
 2. この授業では、自分自身が問題を見つけ、考えることをしてきた。私に大きな影響を与えたこと、それは「アイデアの模索」だ。南短祭の企画でも、プレゼンの仕方にしても、どうすれば来てくれる人、聞いてくれる人が楽しんでくれ、興味を持ってくれるかを考えることの重要性を実感した。他の人と違う、変わったアイデアを出すことが、今、とても楽しい。これから先、何か難しい問題にぶつかった時、その問題にいかにも楽しんで立ち向かっていけるか、自分が楽しめるアイデアを出しながら、頑張っていこうと思う。
-

-
3. 全ての問題がつながっており、悪循環のサイクルに陥っていることを学んだ。その負のサイクルを止め、良いサイクルへ変えるには、まず私たちの意識や日々の生活を見直すことが大切だ。水・ゴミ・貧困・地球温暖化・生物多様性……地球上に存在する問題は全て、私たちの生活から生み出されたものであり、私たち1人1人の生活をもう一度見直すことが必須だ。1人1人に出来る事はたくさんある。問題解決に向けた行動の輪を多くの人に広め、良いサイクルを世界へ広め、全体で行うことができこそ、人間同士も生物や自然とも共存共栄が可能になる。小さな1歩は世界の問題へ繋がっている。だから、まず自分が変わる！
-
4. 私たちが未来のためにできること、それは「引き継ぐ」こと。私たちはこれからいいものも悪いものもひっくり返して、未来を担う子どもたちに引き継いでいかねばならない。でも、悪いもの（環境問題・貧困問題・戦争・紛争）の一方で、たくさんの人に幸せを呼ぶ素晴らしい技術や人々の動きも、この世には存在する。もし私たちが悪いものを引き継がせなくなったら、今ある多くの問題を一つ一つ解決していくしかない。そのために、今の私にできることは、周りの人の「無関心」を「関心」に変えることだ。この授業で学んだこと、それは、自分から動くという「行動力」だ。人には伝わりづらいことがたくさんあるが、自分が実際に体験して、自分の言葉で伝えると、ずいぶん違う。もし、私が将来医療関連の仕事に就くことができたなら、たくさんの人と出会うことになる。その出会いを生かして未来の社会のあり方について話し合いたい。そのためにも卒業してからも常に学び、「伝える」ということを実践していきたい。ハチドリのように一つ一つ自分のできることをしていきたい。
-
5. 先生の授業の内容はいつも何だかヘビーだった。だけど、どの事実も私たちが知らなくてはいけないことで、これからここで生きていくのは私たちだから、私たちがどうにかしないとイケない。卒業したら皆バラバラになり、大きな活動はできなくなるが、まずは身近なところから攻めよう！あと、20歳になったので、もっと政治に興味を持ち、新聞を読んで、選挙に行こう！
-
6. 「知る」ことの大切さを学んだ。だが、授業で学んだことを私たちだけで受け止めるのではなく、学んだことを私たちからまた外へ発信していく必要がある。だから私は、「情報発信」することを続けたい。そのためにこれからいろいろなことに興味を持ち、調べ、学んでいく姿勢を大事にしたい。会社に入っても先輩や同僚に伝えていきたいし、自分の意見をもっと言っていけるようになりたい。CWAH（Children with Hope of Asia*）にも参加して先輩と一緒に活動もしていきたい。私が入る銀行は、様々な事にチャレンジしているので、フェアトレードをオフィスに取り入れるとか、お金を引き出した時に入れる袋を持ってくる人にはエコポイントが付くとか、いろんな企画を考えられたらいいと思う。
- * 筆者注：2008年度の授業で、アジアの子ども買春と貧困の問題に取り組む市民団体「カスパルの会」に長年関わってこられた社会人OG（1992年卒）のゲスト講演をきっかけに、その後、南短現役生が立ち上げた有志団体。
-

**(4) 基本科目【ラーニング・コミュニティ】の課題：プロセス・グループ
編成・評価基準**

以上に見てきたとおり、「大学祭プロジェクト」をはじめ、「学科科目と連動したプロジェクト学習」の教育効果は、一方向の講義による学習と比べ、学生たちが自ら考え・行動することが中心になる分、問題意識を高めて動機付けに成功すれば、学生同士がそれぞれの持てる力を発揮してダイナミックに学びあう場が生まれ、予想以上の教育効果を生み出す可能性がある。基本科目【ラーニング・コミュニティ】でプロジェクト学習を取り入れる意義も、ここにあるだろう。

ただ、そうした学習共同体の生成過程には、学生一人ひとりの参加と関与が必須である。各自が自分で調べ、考えたことを互いに持ち寄って話し合い、一緒に作業するプロセスが不可欠だ。しかし、2年制短期大学の場合、2年次は就職活動や編入試験で忙しくなり、この対話と協働のプロセスに参加できない学生が増える。特にチームの人数が多いと、準備段階の作業を人任せにして、プレゼンテーションだけに参加する「フリーライダー」が生まれやすく、そうなるとプロセス重視のプロジェクト学習の教育効果は望めない。したがって学生には、プロジェクトに意欲的に取り組むプロセスこそが、自らの進路を拓き、生涯にわたって使えるチカラ（知識を活かす力、行動できる力、表現できる力、成果をあげる力）を身につけることにつながるのだということを、最初に理解させたい。また、学生の自発性に任せて自由にチーム編成をさせると、普段の仲良しグループに固定化しがちで、メンバーの多様性が不足し、新しい出会いや異なる視点から学びあう相乗効果が生まれにくい。したがって、グループ編成は、プロジェクトの目的や学生の学力・意欲・適性に応じて、編成の仕方を工夫する必要がある、チーム内にメンバーの多様性を持たせる配慮が求められる。

もう一つ、プロジェクト学習を授業の中で進めていく際に課題となるのが、評価方法と評価基準である。プロジェクト学習は、試験による数値化が可能な知識獲得型の講義とは異なり、学んだ知識を活かして成果を出す

までの学びの軌跡を重視する。したがい、学生同士のピア相互評価や、自己成長や目的達成度に関する自己評価も判断材料になりうる。こうした「プロセス評価×他者評価×自己評価」を反映させて学習成果を多面的に評価する手段が、「ポートフォリオ評価」(鈴木, 2010)である。ポートフォリオとは、自らの意思で、自分から生まれた成果や自分で獲得した情報を一元化してファイルにしたもので¹³⁾、一人ひとりの学生がプロジェクトを通して「何をしたか・どう成長したか・何ができるようになったか」を教員が多面的に見ることができる。同時に学生自身にとっても、これまでの学びの軌跡を振り返り、「これからの自分」の可能性を展望させる機能を持つ。基本科目【ラーニング・コミュニティ】でもポートフォリオ評価を導入する予定であるが、問題は、そもそも点数化できない評価を叶えるためのポートフォリオを使って、どう5段階評価なり、3段階評価なりに落とし込んでいくのかである。複数の教員が担当することになる【ラーニング・コミュニティ】の具体的な評価基準(評価軸・評価項目)については、教員間で十分な合意形成をした上で、共有し、運用していく必要がある。

4. おわりに

現在の短大は、これまでの常識が通用しない変化の時代を生きる女子学生にとって、「知的探求と体験の地平を拓げ、ひとりで生きていけるだけの力を育てる場」となり、「これからの社会を生き抜いていけるだけの職業意識とパワーをつけていく場」(松井, 1997)になりえているか? 10年以上も前に投げかけられたこの問いに、応えるための1つの手段が、必修基本科目【ラーニング・コミュニティ】だ。教育方法論として本学の教育実践の中に様々な形で定着してきたコミュニティづくりの仕掛けは、2011年度から「参加体験型・協同学習型・課題解決型のアクティブ・ラーニング」で能動的に学びあうチカラを育む基本科目【ラーニング・コミュニティ】へ、バージョンアップを図ることになる。基本科目【ラーニング・コミュニティ】は、初めから意欲にあふれる学生だけでなく、迷える学生

を含め新入生全員を「南短コミュニティ」という「学びとケアの共同体」に包摂していく機能を果たす。それは、【ラーニング・コミュニティ】のクラスを拠点に、新しいキャンパスで、学生たちの2年間の学びの軌跡を質的に保証していくための、新しい教育の挑戦である。

* 本稿は、2009年度フラッテン研究奨励金特定研究による研究成果の一部である。

注

- 1) 例えば、広田（2008）は、消費市場以外に若者たちがリアルな社会に接することがない、政治や経済や社会の出来事に触れさせない教育や大人社会のあり方が、若者たちの社会参画力と社会に対する健全な批判力を育てる機会を奪ってきたとして、コミュニティへの「義務」ではなく、若者たちの「権利」として、彼らが「市民になる教育」が必要だと主張し、高校段階以上では自主的に多様な体験や活動ができるような法的・制度的環境を地域・企業・行政が連携して作っていくことを提案している。また、佐藤（2010）は、21世紀の中心的教育使命は「多元的・多層的市民性」（地球社会・国・地域コミュニティという三次元のアイデンティティを備えた市民性）の育成だとして、多文化教育や市民性教育の重要性を指摘している。価値の多元性に開かれた複合的なアイデンティティを持つ市民が、能動的に社会参画できる新しい市民性教育が必要とされている。
- 2) サービスラーニング発祥地である米国では、最近、「サービス（奉仕・ボランティア）」という言葉ではなく、「現実社会・地域に根ざし、他者との関わりの中で課題解決に向けて行動していく学習プロセス」という捉え方を強調して、「エンゲージド・ラーニング engaged learning」「コミュニティ・ベースト・ラーニング community-based learning」の呼称を意図的に用いる実践者も増えている（和栗，2008）。
- 3) 正課科目の「サービスラーニング」は、事前・事後の講義やガイダンスがあり、実践の振り返りによる自己省察・課題分析・対話や発表による体験の共有などの体験学習のプロセスが構造的に組み込まれ、履修条件、単位認定基準などが整備されているのが本来の形とされる（桜井・津止，2009）。
- 4) 例えば、愛媛大学スチューデント・キャンパス・ボランティア (<http://www.ehime-u.ac.jp/SCV/>)
上智短期大学サービスラーニングセンター (<http://www.jrc.sophia.ac.jp/>)

servicelearning/index.php)

国際基督教大学サービ斯拉ーニングセンター (<http://web.icu.ac.jp/slc/>)

立命館大学ボランティアセンター (http://www.ritsumei.jp/vc/index_j.html)

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (<http://www.waseda.jp/wavoc/>)

恵泉女学園大学体験学習プログラム (<http://keisen.ac.jp/univ/gp/saitaku/gaiyou.htm>)

愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター (<http://www.aasa.ac.jp/institution/ccc/index.html>)

東京外国語大学多文化コミュニティ教育支援室 (http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer_mclsc/ja/index.html).

- 5) 南山短期大学 30 年史編集委員会 (1998)；大橋 (2001)；南山学園創立 75 周年記念誌編集委員会 (2007) に依拠する。
- 6) 2002 年の持続可能な開発に関する世界首脳会議ヨハネスブルグ・サミットで、日本の政府と NGO によって提案され、同年国連総会で決議された「持続可能な開発のための教育の 10 年 (Decade of Education for Sustainable Development: DESD)」により、2005 年から 2014 年までの 10 年間、国連の旗艦プログラムとして ESD を推進していくことになった。日本の大学での ESD の実践は、立教大学 ESD 研究センター (<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/index>) を中核に、例えば、岩手大学の全学共通教育の ESD カリキュラム統合化の取組 (<http://esd.iwate-u.ac.jp/subj.html>) や、県立広島大学人間文化学部教員の科目間連携による ESD の実践 (富田他, 2010) などがある。
- 7) この教育ミッションは、筆者がサービ斯拉ーニング系科目を担当し始めた 2005 年より掲げている。辻 (2005)『ハチドリの一とすずく：いま、私にできること』、メドウズ他 (2005)『成長の限界：人類の選択』、ナマケモノ倶楽部「ROR キャンペーン 2003 あなたが世界を変える日ハンドブック」などから示唆を得たものである。
- 8) 学内外の教員と連携して開発したアクティビティを盛り込んだ学際的 ESD テキストとして、五島・関口編 (2010)『未来をつくる教育 ESD：持続可能な多文化社会をめざして』を作成した。
- 9) 構造的暴力とは、平和研究を構築したノルウェーの政治学者ガルトゥングによって提示された概念で、社会のシステムの中で構造化されている不平等 (資源配分に関する決定権の不平等も含む) によって、社会のシステム自体が生み出す政治的・経済的・文化的な疎外 / 剥奪状況を指す (ガルトゥング, 1991)。
- 10) こうした問題意識を養成するためのテキストとして、学生の共感しやすさを重視して、筆者はこれまで田中他 (2006)『世界から貧しさをなくす 30 の方法』を採用してきたが、近年、開発教育や ESD の領域で大学テキストやハン

ドブックが刊行されている。例えば、田中編著（2008）『開発教育・持続可能な世界のために』や、「若者のための ESD」編集委員会（2010）『若者のための ESD：「私」から広がる世界』があり、海外の実践的なハンドブックとしては Stibbe（2009）“The Handbook of Sustainability Literacy: Skills for a Changing World”がある。

- 11) ミックスルーツとは、和製英語で「Mixed Roots」をカタカナにしたもので、様々な文化や国のルーツが混ざった人々のことを大きな梓で象徴した言葉。文化的・人種的・環境的に様々な背景、要素、特性を持つことを指す（ミックスルーツ・ジャパンの HP の説明より（<http://www.mixroots.jp/about.htm>）。一般的には国際結婚家族の子どもや、在日外国人の子どもなど、日本育ちの外国にルーツを持つ人々のこと。
- 12) 「ハチドリ計画」の HP サイト（<http://www.hachidori.jp/home.html>）から示唆を得て、実習系科目【国際ボランティア入門（現・国際協力入門）】の授業の中でプロジェクト学習として始めたものである。
- 13) ポートフォリオは A4 サイズのクリアポケットファイルなどを使い、そのファイルに、「ビジョン」と「ゴール」を書いた紙、「行動計画」を書いた紙、テーマに関係する情報・データ、文献やインターネットからの資料・メモ、現状から課題発見したメモ・写真、気づきやひらめきのメモ、テーマに関係する新聞記事や雑誌の記事、会った人の名刺や記録、プレゼンテーションの作品、改善すべきことを書きだした紙、自己評価、他者評価などを、①日付や出典を明記して、②時系列で入れていくことが基本の作り方で、学びのプロセス全体を俯瞰し、可視化できる（鈴木、2010）。

【引用・参考文献】

- Gabelnick, F. et. al., 1990, *Learning Communities: Creating, Connections Among Students, Faculty, and Disciplines*, Jossey-Bass.
- ガルトウング, ヨハン, 1991, 『構造的暴力と平和』中央大学出版部
- Gough, S. & Scott, W., 2007, *Higher Education and Sustainable Development: Paradox and Possibility (Key Issues in Higher Education)*, Routledge.
- 五島敦子・関口知子編 2010, 『未来をつくる教育 ESD：持続可能な多文化社会をめざして』明石書店.
- 広井良典, 2010, 「コミュニティとは何か」広井良典・小林正弥編『持続可能な福祉社会へ：公共性の視座から 第1巻 コミュニティ』勁草書房
- 広田照幸編, 2008, 『若者文化をどう見るか：日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージ・サーバー

- 本田由紀, 2009, 『教育の職業的意義：若者, 学校, 社会をつなぐ』ちくま新書
- Lave, J., & Wenger, E., 1991, *Situated learning: Legitimate peripheral participation.*, Cambridge University Press.
- メドウズ, H・ドネラ, メドウズ, デニス・H, & ランダース, ヨルゲン, 2005, 『成長の限界：人類の選択』ダイヤモンド社
- 松井真知子, 1997, 『短大はどこへ行く：ジェンダーと教育』勁草書房
- 永田佳之, 2010, 『持続可能な未来への学び』五島・関口編『未来をつくる教育ESD：持続可能な多文化社会をめざして』明石書店.
- 大橋嘉男, 2001, 『キリスト教精神と教育：学長メッセージ』南山短期大学
- 南山短期大学編集委員, 1998, 『南山短期大学三十年史 Spes et Gaudium：人間の尊厳のために』南山短期大学
- 南山学園創立 75 周年記念誌編集委員会, 2007, 『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立 75 周年記念誌』学校法人南山学園
- 日本国際理解教育学会, 2010, 『グローバル時代の国際理解教育：実践と理論をつなぐ』明石書店
- Packham, C., 2008, *Active Citizenship and Community Learning*, UK: Learning Matters.
- 斎藤ゆか, 2010, 「大学でボランティア活動を促進する教育的意義と展望」日本学生支援機構『大学と学生』第 78 号：7-13.
- 佐藤学, 2010, 「20 周年記念基調講演会（7 月 3 日）要旨 21 世紀の学校における国際理解教育」『日本国際理解教育学会第 20 回研究大会発表要旨集録』
- 桜井政成・津止正敏編著, 2009, 『ボランティア教育の新地平：サービ斯拉ーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房
- 鈴木敏恵, 2010, 『看護師の実践力と課題解決力を実現する！ ポートフォリオとプロジェクト学習』医学書院
- センゲ, P, 1995, 『最強組織の法則：新時代のチームワークとは何か』徳間書店
- センゲ, P, スミス, B, クラッシュウィッツ, N., ロー, G., シュリー, S. 2010, 『持続可能な未来へ：組織と個人による変革』日本経済新聞出版社.
- 里見実, 2010, 『パウロ・フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』太郎次郎社
- Stibbe, A., 2009, *The Handbook of Sustainability Literacy: Skills for a Changing World*, UK: Green Books.
- 田中治彦編著, 2008, 『開発教育・持続可能な世界のために』学文社
- 辻信一, 2005, 『ハチドリの一ひしづく：いま, 私にできること』光文堂
- 富田和広・伊東和久・原理・藤井浩樹, 2010, 「大学における持続発展教育の実践と課題」『県立広島大学人間文化学部紀要』5：55-64.
- 『若者のための ESD』編集委員会 (2010) 『若者のための ESD：「私」から広がる世界』立教大学 ESD 研究センター

和栗百恵編著, 2008, 「体験的な学習とサービラーニング」早稲田大学平山邦夫
記念ボランティアセンター WAVOC ブックレット

Wenger, E., McDermotto, R., & Snyder, W. M., 2010, *Cultivating Communities of Practice: A
Guide to Managing Knowledge*. Harvard Business Press.